

「政宗ワールド」フェスタにおける 仙台藩茶道石州流清水派の お点前披露の意義



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世

大 泉 道 鑑



写真1 青葉城址の仙台藩祖伊達政宗公騎馬像と筆者

我が郷土の英雄で、伊達文化の創始とその発展に多大な貢献をした仙台藩祖伊達政宗公（写真1 永禄一〇年〜寛永一三年―一五六七〜一六三六）は、伊達家十六代伊達輝宗公（天文一三年〜天正一三年―一五四四〜一五八五）と義姫（最上義光の妹 天文一七年〜元和九年―一五四八〜一六二三）の嫡男として、山形県米沢城で生まれた。従って、昨年は政宗公の生誕四五〇年の節目の年を迎えた。そのため、宮城県等、政宗公の縁ゆかりの地では、その祝賀・記念行事が数多く執り行われた。その大きなイベントのひとつとして、「政宗ワールド」フェスタ実行委員会主催の「政宗ワールド」フェスタが仙台藩の政治・軍事・経済・文化の中心地であった仙台城（青葉城）本丸址で、昨年九月三〇日に華々しく開催された。このフェスタには、仙台藩茶道石州流清水派（当流）による茶会も青葉城本丸会館大広間で行われたので、今回この様子を中心に、今に息づく「伊達な文化」の魅力を紹介したい。

政宗公生誕四五〇年を迎えようとしていた一昨年（平成二八年）六月に、このプロジェクトの実行委員会は古田義弘理事長及び田中於菟彦事務局長のもとに、「政宗公」、「仙台藩」及び「伊達な文化」をキーワードにして「観光と郷

「土史」と言う視点から設立された市民団体である。その目的は、郷土の誇り伊達文化を代表する伝統的武芸・文芸・芸能を披露し、その教育普及、地域交流及び観光の振興を図ることにある。また、かつて仙台藩の政治的、軍事的及び文化的拠点として重責を担った青葉城本丸址で伊達文化を披露し、ここからそれらを広く世界に発信する意図が込められている。更に、老若男女の区別無く広く市民の皆様が、これらの伊達文化を体験することにより、一層親しむきっかけにして戴きたいとの願いとともに、これらを次世代へ伝えていくことを目指すものである。

このフェスタの開会式が当日の午前一〇時に、青葉城政宗公騎馬像西側の広場で行われた。開会を告げる式典によりスタートし、次に、主催者の古田義弘理事長の挨拶、続いて来賓の村井嘉浩宮城県知事（川端章好副知事代読）及び仁志田昇司福島県伊達市長より祝辞があった。

開会式の終了後は、プログラム（表1）に従って政宗公が華開かせた「伊達な文化」が順次披露されていった。まず、仙台春城会による「さんさ時雨」の「祝い歌」が青葉城本丸会館の庭園にて披露された。この民謡は、古く仙台藩においては、「祝い歌」としてよく知られているが、今

表1 「政宗ワールド」フェスタのプログラム

日時：平成29年9月30日（土）	
場所：青葉城址	
主催：「政宗ワールド」フェスタ実行委員会	
10:00	開会式
10:20	仙台春城会 さんさ時雨
10:30	鉄砲隊 火縄銃演武
11:00	伊達武将隊 演武 石川流清水派茶席 一席目
11:15	仙台春城会 民謡披露
11:50	霊山太鼓 披露 石州流清水派茶席 二席目
12:00	すずめ踊り 演舞
12:40	石州流清水派茶席 三席目
13:00	チャンバラ合戦 一回戦 日置流印西派 奉納・演武
13:30	霊山太鼓 披露 石州流清水派茶席 四席目
14:10	すずめ踊り 演舞
14:15	伊達武将隊 演武
15:00	チャンバラ合戦 二回戦 柳生心眼流甲冑兵法 演武

回はこのフェスタの祝賀の意味を込めて歌われた。次に、戦国時代から戦場で活躍していた鉄砲隊の演武が、仙台藩を代表する花山鉄砲組、片倉鉄砲隊に加え、米沢藩古式砲術保存会の三団体によって行われた。この火縄銃の演武は、大音響を通して、生誕四五〇年に対する祝意を表する意味もあつたとのことである。当日午前の部の後半では、青葉城本丸会館庭園で「奥州・仙台おもてなし集団・伊達武将隊」による演武が行われた。この武将隊は郷土の大人気者で、迫力満点の演武により、このフェスタがおおいに盛り上がったと評判になった。その同じ場所では引き続き、伊達氏発祥の地伊達市の霊山の霊山太鼓遠征組による太鼓が披露された。霊山太鼓の特徴の大大鼓を連打する「曲打

ち」は、勇壮活発で会場に響き渡り、フェスタに華やかさを見事に添えたとのことである。午後の部では、仙台藩縁の日置流印西派弓術が二つの団体により、宮城県護国神社で披露された。そのひとつは吉田清明十三代宗家により、もうひとつは「伊達印西派」弓術研究会によって行われた。

これらの演武は大好評を博し、その体験希望者の長蛇の列が続いた。一方、仙台藩で生れた総合武術である柳生心眼流甲冑兵法の演武が、仙台柳心会により披露された。今回の演武では、実践形の柔及び大迫力の甲冑兵法が行われたが、その勇壮さには目を見張るものがあり、会場が盛り上がり、大変好評であった。その他、青葉城の新築移転の宴席の即興で披露された石工の踊りで始まったと伝えられているすずめ踊りの演舞が、仙台すずめ踊り連盟により行われた。更に、(株) Tears Switch によるチャンバラ合戦―戦IKUSA が華やかに行われ、参加者の人気を博した。なお、主催者によるとフェスタの来場者は、約二、〇〇〇人にも達し、極めて盛会裏に終了した。

ところで、政宗公は戦国時代にはその勇猛果敢さ故に、「独眼竜政宗」の名を天下にとどろかせた。しかし、政宗公の天下統一の夢が潰つぶえてしまった後には、仙台藩の政

治的・経済的基盤を確固たるものにするにだけでなく、伊達文化の礎いしずえを築き上げたと言う評価も極めて高く、我が郷土の英雄たる所以ゆえんである。幼少の頃から資福寺の名僧との誉れの高い虎哉宗乙禅僧師（享祿三年―慶長一六年―一五三〇―一六一一）から薫陶を受けていた。そのため、学問や芸術・芸能については、その当時から高い素養が育はぐくまれていた。その後、本拠地を米沢城から岩出山城に移した頃からは、京都での生活が長期にわたった。そのため、若い頃から都の高度で最先端の桃山文化を学び取り、次第に洗練された美意識が形づくられていった。慶長五年（一六〇〇）に青葉城の建設に着手する際には、京都の一流の名工や絵師を招いた。慶長一五年（一六一〇）には、美術の粹を集めた桃山式書院造りの千畳敷の本丸大広間が完成したが、その豪華絢爛さは注目の的となった。これに加えて、桃山建築様式の大崎八幡宮（仙台市青葉区）や瑞巖寺（宮城県松島町）は、政宗公によって造営・再建された国宝建築として有名である。更に、政宗公は学問をはじめ茶道や能等の芸術・芸能には、一流の師を多く召し抱え、これらの文化を藩内に定着させていった。

ここで、このフェスタの主役である政宗公と茶道との関

わりについて、簡潔に説明しておきたい。これについては、

伊達家治記録（貞山公治家記録）に残されていた政宗公の

茶事に関する記事を年代順に表2にまとめたので、それを

参照して戴きたい。政宗公は、茶道を政治・外交を行うう

えで、うまく活用していた。江戸幕府初代將軍徳川家康（天

文一一年～元和二年―一五四二～一六一六）、二代將軍徳

川秀忠（天正七年～寛永九年―一五七九～一六三二）、三

代將軍徳川家光（慶長九年～慶安四年―一六〇四～

一六五二）の將軍をはじめ有力大名との茶道を通じた交流

を重視していたことが、まず窺い知ることが出来る（表

2）。更に、政宗公にとっては、ごく短期間の付き合いと

なってしまった豊臣秀吉（天文六年～慶長三年―一五三七

～一五九八）の茶頭の千利休（大永二年～天正一一年―

一五二二～一五九二）をはじめ、家康の茶頭今井宗薫（天

文二二年～寛永四年―一五五二～一六二七）、秀忠の茶道

指南役を務めた古田織部（織部流の流祖、天文十三年～元

和元年―一五四四～一六一五）、四代將軍徳川家綱（寛永

一八年～延宝八年―一六四一～一六八〇）の茶道師範に

任ぜられた片桐石見守貞昌（石州）（石州流の流祖 慶長

一〇年～延宝元年―一六〇五～一六七三）の茶道師範で

ある桑山左近（宗仙）（永禄三年～寛永九年―一五六〇～

一六三二）、更に家光の茶道師範を務めた小堀遠州（遠州

流の流祖 天正七年～正保四年―一五七九～一六四七）等

の当時一流の多くの茶人とも折にふれ交流を深めていた点

が注目される。

この中でとりわけ筆者の興味が引かれたのは、天正十九

年（一五九二）に起きた利休の切腹事件であり、これには少

なからず政宗公も関わっていたと言われている。この事件

の真相は、不明な点が多く、現在でも諸説が入り乱れてい

る。その解明には、この時代の政権中枢において繰り広げ

られていた深刻な権力闘争の状況を充分に考慮することが、

重要であることだけは確かなことである。その当時、秀吉

による全国統一事業が急速に進められていたが、その豊臣

政権内部では、秀吉側近の奉行らの石田三成（永禄三年～

慶長五年―一五六〇～一六〇〇）派と下剤上を体験してき

た武将らの家康派による激しい権力闘争が繰り広げられて

いた。この政権内で利休は、絶大な権力を有していた様で

ある。この様な政治情勢下、天正一七年（一五八九）に北

条氏の本拠地であった小田原攻めが始まった。この時政宗

公はやっと重い腰を上げて小田原に死に装束で馳せ参じた

表 2. 伊達政宗公と仙台藩茶道

『伊達家治記録（貞山公治家記録）』の記事

天正 15 年(1587)	正月	政宗公の茶道に関する最初の記事「御鷹屋の茶会」。その後もしばしば茶の饗応を受けた。
	9 月	新茶室で数回にわたって茶室披きを行った。
天正 18 年(1590)	6 月	豊臣秀吉の小田原北条氏征伐に遅れて参陣。千利休に参会出来るよう取り計いを申し出たが、利休の体調不良により取り止め。
天正 19 年(1591)	2 月	初上浴の時、利休に初面会を果すが、その直後利休は切腹。
文禄 2 年(1593)	9 月	朝鮮出兵から帰還後、秀吉から伏見に屋敷を与えられた。そこは、大名間の社交の場として茶湯が盛んであった。
慶長 3 年(1598)	12 月	徳川家康の茶頭今井宗薫の仲介で、長女五郎八姫と家康の 7 男徳川忠輝が婚約。しかし、宗薫は大名私婚嫁禁止令違反で蟄居(ちつきよ)、忠輝は追放。
慶長 4 年(1599)	4 月	家康からしばしば茶を賜わり、翌年茶入小肩衝(かたつき)を贈られた。
慶長 11 年(1606)		二代将軍徳川秀忠に江戸屋敷で茶を進上。
慶長 15 年(1610)	5 月	駿府で家康から茶入樋口肩衝を拝領。これ以降、将軍から茶を賜わったり、大名との茶会の記事が頻繁に見られる。
慶長 17 年(1612)	12 月	石州流流祖片桐石見守貞昌(石州)の師範桑山左近(宗仙)の名が初めて現われ、以後政宗公は宗仙をしばしば茶会へ招いている。
慶長 18 年(1613)	11 月	幕府御見廻・田代養元へ茶を饗したが、その際一世清水道閑に相伴を命じた。この時に道閑の名が初めて現われ、これ以降道閑はしばしば茶席に列している。
	12 月	遠州流の流祖小堀遠州の名が初めて見え、硯二面、鮭子(さけのこ)龍(ごもり)五尺(ごせき)に書を添えて遠州に贈った。
寛永 12 年(1635)	正月	三代将軍徳川家光に江戸城で茶を饗し、茶入侘助肩衝を拝領。

<参考>

慶長 6 年(1601) 11 月 織部流の流祖古田織部の夜咄に政宗の名。その後、時々茶会に招かれている(『今井宗久茶湯書』下巻)。

ものの、だいぶ遅参したことに、秀吉が立腹した。そのため、政宗公は謝罪するとともに、利休による茶を所望してやつと赦免されたと言うあの有名な逸話が残されている。

その後、政宗公は急速に利休に接近を図り、弟子入りのための金品等を贈っている。この様にして、利休は政宗公と秀吉の取次役と言う重責を果していった。ところで、利休の切腹の罪状は、大徳寺山門の修復時に自らの像をこの山門二階に設置したと言う秩序に反する高慢な行いのためとされてきた。また、その罪因としては、葛西・大崎一揆（天正一八年―一五九〇）の黒幕とされた政宗公への嫌疑に対する名誉回復との政治取引として、三成派が要求した「利休の追放」が、あげられている。これらの歴史的事実を考え併せると、政宗公を巡る両派の激しい政治的対立が、利休を死に追い込む遠因とされ、これとあいまって三成派の讒言ざんげんがその近因とする両方の説で起きたと考えるのが現在、有力視されている。

さて、当流の茶会は青葉城本丸会館・大広間で盛大に行われた（表3）。当日の茶席の準備は午前一〇時から開始され、何の滞りもなく速やかに整えられた。大広間の中央に茶席が設けられ、その正面には二代藩主伊達忠宗公（写

表3. 仙台藩茶道石州流清水派の点前披露のプログラム

日時：平成29年9月30日(土)			
場所：青葉城本丸会館・大広間			
司会進行：十一世 大泉道鑑			
亭主：大泉道紀			
席	(時間)	点前	主客
一席	(11:00~11:40)	守屋道美(教授)	聖和学園高等学校茶道部長殿
二席	(11:50~12:30)	金城道里(師範)	伊達武将隊 支倉常長殿
三席	(12:40~13:20)	坂本文葉	宮城県護国神社宮司 田中光彦殿
四席	(13:30~14:10)	亀田 修	伊達武将隊 伊達政宗殿

真2 慶長四年〜万治元年―一五九九〜一六五八)による
自画賛の掛軸(写真3 当流の弟子亀田治所持)が掛けら



写真3 仙台藩二代藩主
伊達忠宗公筆掛軸



写真2 仙台藩二代藩主伊達忠宗公像
(仙台市博物館蔵)

れた。忠宗公は、当流二世清水動閑（慶長一九年〜元禄四年―一六一四〜一六九二）を石州のもとに一三年間の長期にわたり弟子入りさせ、仙台藩の茶道が石州流に変わる



写真4 仙台伊達家
十八代当主伊達泰宗様により
「六十二万石」の銘を戴いた大棗

と（写真
5）、まず
一席目が
予定通り
午前一一
時に守屋
道美（教
授）によ
り、薄茶

きっかけを作った藩主である。また、棗は仙台伊達家十八代当主伊達泰宗様により、「六十二万石」と銘が付けられた大棗が使われた（写真4）。この大棗は、泰宗様の取り計らいにより、東京国立博物館学芸員中島淑枝氏が筆者の母、十世大泉道鑑（明治四二〜平成二二年―一九〇九〜二〇一〇）のために特別に製作したものである。この美しい大棗の表側は、総高蒔絵で伊達家の家紋「竹に雀」が描かれ、その内側は総梨子地で蓋の内側には泰宗様の花押が印されている。この大棗こそは、伊達家・藩主と当流の宗家・茶道頭の太い絆を象徴するものである。

司会進行（解説）を務めた筆者及び亭主の大泉道紀のもの



写真6 一席 守屋道美(教授)の点前



写真5 司会進行(解説)を務めた筆者(中央)亭主の大泉道紀(右)

の点前が開始された。この一席目では、当流の点前の特徴を一言で表す言葉とされてきた「雅^{みやび}たわび」を正に感じさせる見事な点前が披露された(写真6)。この点前は、当流歴代の茶道頭が藩主に茶道指南を行っていた内容と違わぬものであるので、かつて藩政時代に青葉城で行われていた藩主の関わった正式な茶会をその通り見事に再現するこ

とが出来たと考えている。従って、この様なことが可能である当流は極めて稀有^{けう}な存在であり、伊達文化の中核を成していた貴重な文化遺産として、ある意味では奇跡的に藩政時代のまま生き残り、現在に至っていると見えよう。この様な理由から、筆者はこの伊達文化を正しく継承した者としての責任の重大さを自覚しなければならぬと、常常自分に言い聞かせてきた。一方、今回披露したのは薄茶の点前であったが、当流では薄茶が「真の茶」として重んじられてきた。これは、利休が「わび茶」を成立・大成させた過程を、直接見聞していたその高弟の山上宗二^{やまのうえのそうじ}(天文一三年〜天正一八年―一五四四〜一五九〇)の茶道秘伝書『山上宗二記』の「茶湯者又拾躰」や当流の祖三世清水道竿(寛文二年〜元文二年―一六六二〜一七三七)が「茶人の心構え」について著わした『道竿拾躰』には、「濃茶ではなく薄茶が真の茶と言う。」と記されており、藩政時代からの当流のこの様な「わび茶」の伝統に従って、今回の四席の全てで薄茶の点前を行うことにした。なお、『道竿拾躰』の解説研究については、筆者は十世大泉道鑑と共著で、『茶の湯文化学』(二八号)に昨年投稿・発表したもので、この詳細はこの学術誌を参照して戴きたい。

一席終了後、二席金城道里（師範 写真7）、三席坂本文葉（写真8）及び四席亀田治（写真9）の三名により、いかにも大名茶らしい威風堂々たる、しかも優美な点前が順次行われた。

当日の参加者からは「江戸時代の青葉城における藩主による茶会がよみがえり、それを体験出来た。」「さすが高度な伊達文化の中心的存在であった流儀だ。」或いは「まるで王朝絵巻を見ていた様だった。」等過分なお誉めの言葉を戴き、筆者は多少安堵するとともに、今まで仙台藩の正式な流儀を正しく継承し、守り抜いてきた努力が報いられたと思った。これらの励ましの言葉を戴いた参加者に



写真7 二席 金城道里（師範）の点前

加え、日頃の熱心な稽古が本日大きな実を結び、点前を見る人に深い感動を与えられるまで成長を遂げた弟子達にも併せ

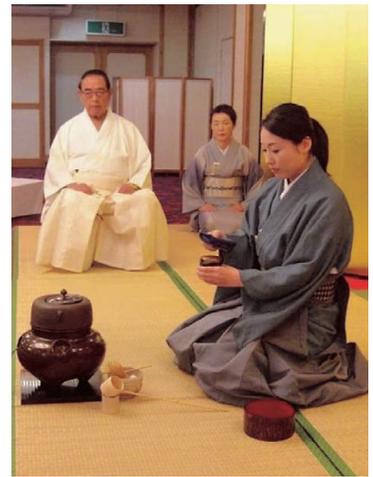


写真8 三席 坂本文葉の点前

て心から感謝した次第である。



写真9 四席 亀田治の点前

藩政時代には、当流の歴代の茶道頭は青葉城で藩主の茶道指南役と言う重責を担うとともに、そこで行われた茶会では指導的役割を果たしてきた

た。昨年は、明治四年（一八七一）の廃藩置県から一四六年、明治元年（一八六八）の明治維新からは実にほぼ一五〇年経過した記念すべき節目の年であった。従って、当流にとって正に聖地とも言わべきこの青葉城・本丸における茶会は、図らずともほぼ一五〇年ぶりにやっと実現に漕ぎ着けたことになり、当流にとっては大きな歴史的な出来事であった

といっても過言ではない。しかも、今回の当流の披露も、記念すべき茶会に相応しい内容となり、宗家を預かる者として誠に感慨無量であった。

これを期に五〇年後の政宗公生誕五〇〇年、また明治維新から二〇〇年の大きな節目の年に向けて、筆者は当流の更なる発展のために全力を尽くす所存であることを、藩祖政宗公をはじめ歴代の藩主並びにその指南役を務めた当流の歴代の茶道頭、更には明治以降これを正しく継承した宗家達に深い感謝の意を込めながら、心に誓った次第である。

謝 辞

「政宗ワールド」フェスタにおいて、当流の点前を披露する機会を下さった主催者の古田義弘理事長、田中於菟彦事務局長並びに阿部和子理事（伊達家御廟大年寺会長）に深謝申し上げます。また、本稿に使用した写真の一部をご提供下さいました一力徳子理事にお礼申し上げます。

参考文献（五十音順）

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五〇年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解 石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑）丸善出版センター 昭和五十五年

『伊達治家記録』伊達家編纂 仙台市博物館蔵

『伊達忠宗公筆掛軸』亀田治蔵

『茶の湯文化学』二八号「動閑拾躰」（解説）

十世大泉道鑑 十一世大泉道鑑

『道竿拾躰』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵

『「政宗ワールド」フェスタ事業報告書』「政宗ワールド」

プロジェクト（吉田義弘、田中於菟彦）平成二九年

『山上宗二記研究』茶の湯懇話会 財団法人三徳庵

平成六年

『山上宗二記付茶話指月集』熊倉功夫 岩波文庫

平成十八年

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 淡交社 平成十九年

付 記

当日このフェスタの参加者に配布された当流のご案内（チラシ）を次に掲載したので、当流のルーツの理解を深めるのに少しでもお役に立てば、誠に幸である。

伊達文化を最も色濃く今に伝える仙台藩茶道 石州流清水派について

仙台藩茶道石州流清水派宗家 十一世 大泉 道鑑

仙台藩々祖伊達政宗公は、藩の政治的・経済的基盤を確立させただけでなく、当時の最先端の桃山文化を導入し、高度な「伊達文化」を生み出したことも、我が郷土の誇りである。仙台藩茶道は、政宗が、織部流の祖古田織部公の高弟一世清水道閑を仙台藩茶道頭に抜擢したことに端を発している。そのため、瑞鳳殿で行われる政宗公の遠忌法要で、毎年献茶を行っている（写真1）。ところで、あの有名な「伊達騒動」の主人公四代藩主伊達綱村公は、儒教や仏教等を重視した文教政策を積極的に推進し、特に茶道に傾倒してその道を極めた数奇大名として、天下に名声を馳せた。この綱村の指南役を務めたのは、最初二世清水動閑で、石州流の祖片桐石見（いわみ）守貞昌（石州）公（将軍徳川家綱公の茶道指南）の高弟として、著名であった。また、二世動閑は石州が将軍家の茶道の規格を定めた『石州流三百箇條』の註解書の著者としても、歴史にその名を刻んだ。動閑没後、三世清水道竿が綱村の茶道師範となり、石州流清水派（当流）を仙台藩に確立させると共に、全国各藩にもこの流儀を広めた功績から、当流の祖と称されている。当流は、歴代藩主の庇護のもとに代々の茶道頭により、明治以降はそれを継承した代々の宗家により、藩政時代の流儀が変わることなく連綿と今日まで受け継がれてきた。なお、仙台藩茶道の正式な流儀である当流を継承した印として、二世動閑の著書『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）と『動閑茶湯書』（十八冊）（写真2）、二世動閑筆『渋紙庵之記』（掛軸）及び老中松平周防守康福（妙閑子）筆『片桐石見守貞昌宗関居士像』（掛軸）は、歴代の茶道頭・宗家を経て当代十一世大泉道鑑まで引き継がれてきた。上に述べた理由から、当流が「伊達文化」を最も色濃く残した貴重な文化的・芸術的遺産であるといっても過言ではあるまい。そこで私共には、この流儀を正しく後世に未来永劫伝えていく責務があると考えている。



写真1 政宗公の法要における大泉道鑑による
献茶の点前（於瑞鳳殿）

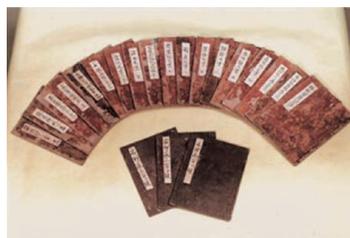


写真2 『清水動閑註解石州流石州流三百箇條』
及び『動閑茶湯書』